

---

# 無限暴走航路

0シュウト0

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

無限暴走航路

### 【Zコード】

Z2763Z

### 【作者名】

0シユウト0

### 【あらすじ】

ユーリが出てこない無限航路の小説

主人公が転生系です。故にパロディ、ご都合大量

## 始章

惑星ロウズ…

夜、空に浮かぶボイドゲート。僕はそれを見上げていた。

いつか、大銀河を渡る〇Gドッグになる事を夢見て…

始章・ロウズ編

ロウズ周辺宙域

「ちつ…早打ち男は嫌われるよ…」

一隻の輸送船を改造した艦、デイジーリップ操る女性が叫ぶ

それを追つよつこ三隻の警備船、レベツカ級が追いかけてレーザーを撃つ。

そのうち一発が翼のように広がった部分に被弾する

「ツ…やべえええ！」

爆発し、その余波でロウズへと落下していく。

「…え

その落下していく先には…銀髪の少年がいた。

## 1章 ロウズ編

…少年の目の前には巨大な船が落ちている。

轟音と共に落下してきたそれは少年の脇を通過してその巨体を地に落としていた。

「いたたた…」

船から這い出てくる女性

それに少年は駆け寄つた…が、少年は倒れてしまった。

「え！ ちょっとアンタ！」

女性はその少年を抱き起こす。

そしてショートする船内へと運んでいったのだった

少年 side

「知らない天井だ…」

覚 目  
める俺

いやふざけてる場合じやないな。

無限航路やついたら突然画面が光り輝いて、気がついたらベッドの上だつた。

つかめつちゃ暗いのはなんでなん？

「気がついたかい？」

声のほづを見るヒトスカさんがいた。……！」叫ぶか

「打ち上げさん！？」

「いや、微妙に違う……いや合つてるとか？」

俺の一言で首を傾げる

つかアレか？ゲームの中に放り込まれたとかか？

『デジモンワールド的な！？』

…もつこじのネタわかるのこないか…

side out

? ? ? side

「ヒラ――ヒラ――」

「カンソクシャー！イジョウアリ」

「コチラカラノカイニユウウケツケズ」

「ウワガキモフカ」

「イレギュラー！イレギュラー！」

「ツイセキシヤトウニユウフカノウ」

side out少年 side

さて、どつか騒がしいみたいだが…

まあ状況をまとめるとだ。

「確かに飛ぶだけはいけるねえ」

「大気圏離脱したらトトラスに向かいましょう。」

航行に支障が出ない部分からパーティ集めて船を直した。

被弾したところはバラし、気密を保つため穴をふさぎ、ディイジーリ

ップは推進装置とブリッジのみの形になった。

トスカさんは泣っていたが、ロウズで一生過ごす氣ですかと聞いた

ら泣々了承してくれた。

てかまさか修理出来るとは驚いた。

頭の中についたコーリの記憶まじばねえ「ああて…いこつか…」

次の瞬間…意識を失った。  
ま…た…か…よ…

side in

side out

「子坊。起きなよ。

身体が揺れ、意識が戻る。  
するどいだらう。

目の前に『売却済み』とかかれた。デイジーリップがあるではない  
か。

…確かにデイジーリップってエキストラモードのGだつた！

…そして氣づくとトスカさんに肩に担がれていた。

「ちつたあ輸送船を買ひ足しこはなるだらう。設計図買わないと  
ねえ」

寂しそうにトスカさんは笑う。

…そして俺は

将来来るであろう。トスカ必死イベント回避を予期して内心ガツツ  
ポーズしていた。

んでトトラスの設計図屋

絶望するトスカを横田に一つの設計図を手にする俺

なんで絶望してるかといつと、デイジーリップは解体費と売却費が  
同額だったからだ。

なんでも船を売却する場合、

売却費 - 解体費という数式が出るらしい。

本来は「ディジーリップはマイナス値になるとこりだつたが、ドロイドのお情けで0になつたのだ。

ちなみに俺は目前の2000000Gでお買い物である。  
周回プレイのままらしく、高額を所有していた

「夜も未だねえ」

といいつつカップ酒を飲む

…手持ちないのかと聞いたら宵越しの金はもたねえ!とか言われた。

カップ酒代は俺が出しました。さて、入手した設計図はアルク級とジユノー級である。

性能的には大差はない。スマゼランと比べれば微々たるものである。

ただしジユノー級のほうが貨物室一個分くらい配置しやすい。  
ただし戦闘艦としてはアルク級が若干高いのである。

とりあえずアルク級を作るかな。

俺はトスカさんを残して軌道エレベーターに乗った  
んで飛んで次の日

「しつかしよくもまあこんな人材を集めたねえ。一通りいるじゃないか。」

「トトラスだけで半分ですがね。ロウズ以外の惑星なら集めるのはなんとかなりました。」

総人数150人を雇うことに成功した。  
ロウズ宙域では宇宙に出れる人は決まっているため、数を集める事はできたのだ。

「しかもあんな大金持つてたなんてねえ、子坊を侮っていたよ  
「俺は…ゼロですよ。ゼロ」

某強化人間研究所の最初の男、もしくは反逆の人の名を名乗る。

「ゼロねえ…まるで偽名だねえ。相当やましいことがあるのかい?」

姐さんの眼が冷たい！

「さて、出発すよーーーとつあえず目指せ3000撃破！」

「…」

まだ冷たいよ…

ちなみに何故3000というとただ単にエルメラーダ級が欲しいだけである。

ロウズの時点ではエルメラーダ級…ロマンです

まあネージリッドの最新鋭艦がいまの時点で入手可能かは知らない

けどね。

ゲームの中では確認済み。あれは面倒だつたぜ。ストーリー無視してずっと口ウズで名声稼いでたからなあ。まあおかげでの眼抉られるイベントでグランヘイムが自分の船の上のまつに止まるのがわかつた。

いいのか悪いのか…

そんな訳で空間通商管理局でランギングを確認できるため、おそらくエルメラーダ級やバロンズイウス級が手に入る。高額でかせばつて使いづらいだろうけど、モジュールも手に入るしな。

「あ。トスカさん。副官お願いしてもいいですか？いくら雇えたといつてもトスカさんが一番信用できますし。」

「構わないよ。プレーよつましだしね」

ちよ。それ別の人との台詞つ

ともかく、司令艦橋へとあがると職歴から信用できそうな連中… ようはその筋のリーダーや専門家が集まっていた

まあ俺が艦橋要員で集めたんだけどね…

「艦長、聞いていたより若いわね。」

シアンさん、女性、24歳

元アナウンサーなのでメインオペレーターをしてもらいつてる

「でもいいんじゃない？美形よ？」

航海長

ヒメさん、女性、24歳

シアンさんの同級生で航路地図会社の社長していたらしい。

「よろしく頼むぜー・艦長ー。」

砲雷班長

ジランさん。男、28歳

元ロウズ警備船の砲雷士してたらし

「艦橋での挨拶は済ませたツスよ」

レーダー管制長

マドさん、20歳、男性

ジランさん同様元ロウズ警備船員

「インフラトンインヴァイターも最高潮だつたよ。」

機関長

レインさん、69歳

実はかつてテラコンダがまだOGドッグしてる時の機関長だつたら  
しい。

…大物かも

でも艦橋要員じゃないのに何故いるし

「俺らはまだ仕事ないから挨拶に来たぜ。艦長」

整備長

タカギさん、男、30歳

元ロウズ警備船の整備士

「出航してからが仕事アルからね。」

シェフ

ワンさん、42歳

家族率いて参加の料亭の人

：つか心読んだ？

「ま。搬入作業も終わりですからもう出航しますよ。

「了解。空間通商管理局に連絡いれます。」

船が動き出すためにその巨体を揺らす。

「よし、飛べッ」

その一言を合図に俺たちは宇宙へと旅立つた。

## 2章 ロウズ終幕編（前書き）

お初ですね。前話はいかがでしたか？

さて今回はいきなりオリジナル艦がでます。『いつ』期待！

## 2章 ロウズ終幕編

ロウズ警備船船長 side

「『黒』捕捉、砲雷士、目標標準！」

「今度こそ叩き落とすぞ！」

例え適うまいとて仕掛けざるを得ない。この職についた事を激しく後悔していた。

黒いアルク級を旗艦とした駆逐艦の艦隊がロウズ宙域に現れたのは2ヶ月前、最初は一隻だったが、今ではアルク級が二隻、ジユノー級が三隻と

増長されてしまっている。

しかし領主のテグラソーダには第一級最優先目標と言われているので見つけ次第攻撃せねばならない。

「くそつ…全弾回避された！」

「目標に熱量増大！ 攻撃来ます」

「総員退艦ー！」

やはり適わないか…

side out

ゼロ side

「よし、ナイス。砲雷班！」

「いつも通り原形は留めさせたぜ」

駆逐艦で精密射撃つてすげえわ。うちの砲雷班

原形留めさせたのはまた出てきてもうつためです。

これを宇宙港に持つていつて売るんだが、売った中古品をまたロウズ警備船として買ってもらう。

んでもた奪つていうループで生計立てている。

名声値ももらえるし。拿捕するのもうちくらいなのでおいしくいただいてます。ちなみにアルク級一番艦とジユノー級一番艦以外は無人で、輸送船扱いだ。

アルク級一番艦は盾も兼用するし。

ジユノー級の指揮はトスカさん…ではなくなんとトーロである。

バッショで雇つた人間の中にトーロがいたのは驚いたね。  
何故かは知らん。

けど初対面だからなんとも言えなかつた。

履歴によれば輸送船団率いていたから一隻任せた

トスカさんには副官として色々アドバイスもらわないとだしね。

「シアンさん、カウンントは？」

「今のところ、2871隻ね。2ヶ月でこれは凄いんじゃない？」

「一日で50隻くらいこやつたときもあったからな。

「一回トライアスにもどるーか。ジユノーにも入電。」

「アイサー。キャプテン」

「やあやあランキング見に行こつか。」

エルメラーダ級欲しいんだよねえ。

バルonzイウス級って性能良いけど拡張性割と良くないから、長距離航行に向いてなさそうだし。居住性も考えないとだしな。

「しかし完全に海賊つスね。」

「いいんじゃない？相手はテラコンダだけだし」

ま。問題はいつヒルシーが出てくるかなんだよね。  
原作なら即イベント発生したのに…

もしかしたらチャエルシー無しになつてる？

「あ。ジユノー一番艦から入電。」

「ん？画面に出して、」

「一口の野郎…なんの用だりつ？  
『つづく』

「用件いえ。」

『つめてえな。俺とお前の仲だろ?』

「いやそんな仲になつた記憶ないし」

ランキング早く見に行きたいんだけど…

『まあいいや』

よくないわい

『一コース見てみるよ。テラコンダ本人が直接ゲート張るらしいぜ』

まじすかい?

「にゃにゃ?... シアンさん?」

「はい、今確認しました。専用艦使つみたいでゲートに向かつて今朝出航したようです。」

確か大出力レーザー積んでるんだつけ…

うは、面倒…

トトラス宇宙港へ

とりあえずランキング見に空間通商管理局いこつか。  
積んでいた荷物を五隻の艦から卸す間、メンバーにはみんな、お暇  
を『えた。

首ではなく休暇だよん。

「しかしよ。ランキング見に行くのはいいがそつかんたんにあがるのか？」

「いや今まで簡単じゃなかつたからね？」

トーロと一人でランキングを見に窓口にいく。

トスカさん？ あの人は酒場いつたよ。

「いらっしゃいませ！ ランキング順位の確認ですね」

「うす

他に向じこじこへんのよ。

「お客様のランキングは……なんと20位です……」

「……まじかよ」

唚然とするトーロ

いや狙つてたからね？  
んで初確認だからな……

「……えつとこちらがランキング報酬になります！」

なんか大量に設計図キター！

大半はモジュールだな

「…バロンズイウスに…未完成の謎の設計図う？」

見た目エルメラーダ級っぽいんだけど、若干形が違うっていうか…  
「翼なくね？」

「は？」  
「え？」

なにいつてんだこいつ、みたいな顔で俺の顔みるゾロイドと一口。

なんか双胴艦みたいなシルエットではあるんだが、翼っぽいないし、  
翼っぽいのあつた部分の甲板にMサイズのレーザー砲ついているん  
だよね。さらにMサイズの砲がMサイズにランクアップしてゐ

つまりL×3、M×3の超攻撃空母になつてんのよ。

「なんなのよ。これ」

もう聞くしがあるまい。

「これはネージリッドで開発されていましたが、断念された空母で  
すね。単艦で戦艦と空母の役割を同時にを行うためのものらしいです。」

「

…要はエルメラーダの前身的なのか？

「…「つじ。」これ黒く染めて作る。」

「…2000級か…小マゼランでは敵なしだな。」

グラッシュイムといい勝負できたらいいな。

ちなみにランキングみたらヴァランタインさんの名声値、一億突破してたね。ですがに原作とは違うか。

ちなみにローリングは22位、サマラさんは18位、グラッシュユは55位だった。

その辺は原作とは違うのね「そつこねば、俺らってどんな感じに見られてるんだ?」

と、トーア

俺も気になるな

「ロウズ警備船やアーランダを崇拜する方々からは海賊として、宇宙に出たい方からは義賊のように見られてますね。ロウズ宇宙では指名手配されますが他の宇宙ではランキングに生きなり上位にめり込んできた猛者のように見られていると思います。」

流石ドロイド、一息でこうとむ…

「海賊か…」

「船から降りたくなつたか?トーア」

物資の運搬に関してはプロ並みのトーアが抜けたら痛いからやめてほしくないがな…

「こんなや?他の宇宙いったら大した事にならないだろ?お前次第だけどさ。」

「ま。他の宇宙では海賊狙いたいとこだ。」

流石に軍に睨まれたらヤバいっつーの

「じゃ、トーロ好きこじついぜ。俺は空母作つてへる」

「おうよ

俺はトーロと別れて造船所に向かつた。

造船所ではアルク級やジュー級、フランコ級が改修や製造されていた。

実はロウズ警備船が大量にやられたため、ロウズの法を無視したい反デラコンダの連中が宇宙に出まくっているからだ。とはいえゲートが閉鎖されているため、他の惑星間のみであるが…

…俺のせいか？

まあいいや。

「いらっしゃいませー。」

「これ製造したいんだ。」

そういうてエルメラーダ（？）級の設計図を見せた

「ひからは宇宙初の開発ですので名前のほうをつけてしまふますか？」

？

「やつぱり名前ないのか…」

エルメラーダとつける訳には行かないからなあ…

…よし。

「ソロモン級双胴空母で！

「了解ですー。」

もちろん亡靈とかいる某宇宙要塞から命名しました。ただ接近されたら弱いから早く本国いつてまともな軍用駆逐艦買ないとだな。

けどエルメッシュならアーメスター級だよなあ

軍人についたら交渉してみるか。

そして俺はコンソールで船内のモジュールを配置していくのであった。

完成は明朝らしい。

足りない人材はドロイドいれないとな。

ちなみにドロイドってあれだ。オープニングムービーでコンソール叩いてたロボット。

人間の代わりにはなるけど、突発した能力ないからな。可能な限り人を雇いたい。

…それを終えたら寝よ

side out

翌日

「…  
…  
…  
…  
…」

「お。やつぱりでけえな！」

「感想ありがとうトーロ。君は心の友だ」

トーロ以外無言ついビード。これ。

まあグランヘイムよりでかい艦の前で普通よりましたが。

「…なんだいこれ？」

トスカさんがようやく口を開いた。

「ソロモン級双胴空母。宇宙で俺しか持つてない超大型艦。我らが旗艦にして、新しい家だ！」

そう。そこにあるのはエルメラーダに酷似してるが、翼はなく、通常の戦艦を超える砲塔を標準装備した漆黒の空母。

「ちなみに、スポーツジムに自然ドーム。シップショップ、大型浴槽完備、食堂も一流ホテル越えの設備、医務室も病院並みだ。見ての通り空母なので格納庫や整備室もでっかいぜ」

ランキングでもらった。

「「「う、うおおっ！」」」整備士、生活班、保安員を筆頭に歓声

があがる。

ちなみに科学班はないのよ。

何故なら乗船希望の科学者がロウズ宙域にいないから。

「艦橋もアイルラー・ゼンのものだ。管制室の機器も最高のものを用意した！」

「「「わああー！」」」

今度は全員から歓声があがる「しかし金が少しだけ…！」

「…」

今度は冷めた…だと…！

「故に、いまのままロウズ警備船を襲つていては無意味だ！これより我が艦隊はゲートの敵を蹴散らし、エルメッシュ本国を目指す！俺についてくるものは続け、去るものは去つても構わない。ただし一言言わせてくれ。今までありがとうございました！」

そつ言い終われば艦への入り口を開ける

「「「わあああー！」」」

「私はついでこくよ。これからは正式にクルーだ。」

とアスカさん

「みんなはええな…」

と一口

この一人以外みんな我先にとソロモン級へと入つていった。

早い。早いよ。

「あ。トーロ、当面は保安局長についてくれ、アルク級とジュノー級は全て前衛で前に出すから無人にした。」

「いいぜ。艦長職は肩がこるしな…」

「じゃ私等もいくよ」

「氣づけば俺たち以外いないし。

うちのクルーまじぱねえ…

それからそれから

各部署に人員が行き届くまで一時間かかり、ようやく出発した。最初の1日こそ「ゴタゴタ」したが、1日半かけてボイドゲート前までやってきた。

「艦長！ 敵旗艦から通信です。」「受けてやりな。」

「了解。」

「デラコンダのやつナンのようだ？」

『君がゼロ君だね？ さあ口ウズに戻りたまえ。今なら刑も軽くして

やうひ。』

偉そつな…

俺。偉そつな傲慢なの嫌いなんだよね。

「砲雷班、威嚇で敵旗艦の大型砲に主砲3つ発射」

「オーケイ！」

『なに！？』

ソロモン級からレーヴァーー」といつべき3つの閃光が放たれる。  
それはデラコンダの旗艦…

右側に大型砲をつけた超アンチシンメトリーな艦の大型砲に直撃し、  
爆散させた。

「帰りたまえ？ 帰るべきはそっちだろ？ てか避けろよ。そのための  
威嚇なんだからな」

堂々と通信で言つてるんだから回避行動取れよ…

『ちつ…ならば全勢力で相手してやるつ。』

「艦長？ レーダーに感あり、ボイドゲートのからレベッカ級がくる  
ツスよ。10機…いや20機！ さらにジャンゴ級10機」

…よし。ならば戦争だ！

「アルク、ジユノーを前方へ出せ！ 砲雷班は敵射程外から迎撃！」

「「了解！」」

ソロモンからレーザーが何度も放たれる。

まあレベツカ級はアルク級の連装砲が直撃するだけで落ちるのでオーバーキルになる。

あとでわかつた事だがソロモン級は対艦の数値がバルンズィウス並だった。

空母としちゃあり得んよ…。 もはやチートだね。

「レベツカ級、八隻大破！ ジャンゴ級一隻が消滅！」

レベツカ級はなんとか回避してかすつたようだが、大破か…でも直撃したジャンゴ級は消滅つ…

「…『めんなさい』

「いやなに謝ってるんだい！？」

いやだつて消滅だよ！？

凶悪すぎでしょ…うちの艦！ 「いや残骸すら残らないのは…」

「宇宙に出ているんだ。ダークマターになるくらいは承知してるだろ？」「

「ならいいっすけど…」

そして相手の射程外から撃つてるため攻撃が来ない。

しかもソロモンはその凶悪な主砲と副砲を撃ちまくつているわけで…

「…敵旗艦以外逃亡」を始めました。」

「「「だろうね…」」

艦橋にいる人の心の内が 一緒になつた。

「敵艦隊に通達。ボイドゲート封鎖を解くのであれば攻撃をしない。ただし依然として敵対するのであればダークマターになつていただ

く。と」

「了解です。」

わざわざ追撃する必要ないしな。案の定旗艦以外は逃げていく。

残るはテラコソンダただ一隻！

『小僧…貴様ああああ…』

うは。テラ怒つてる（笑）

「まあ落ち着け。砲雷班、目標あのテラコソンダ」「ブツ…り、りょうかいっ」

「かんちょ…それは…」

「あつははは！」

決まった…てか皆のツボにはまつた。

『ぐぬぬぬ！このままでは済ませんぞ…』

「つ…通信、切れました。」

「敵…旗艦、接近！」

笑いが止まらない件（笑）

こらえながら仕事してると皆

「さてまじめになろう。砲雷班、敵旗艦前方に集中砲火！アルク級  
やジユノー級からも撃たせろ！」

「おう！」

「テラコソンダの船は最大戦速でなのが、かなりのスピードで迫ってく

る。

「流石に特攻はまずいぞ？」

「主砲、副砲着弾、敵艦通常砲門開口！熱量増大！」

「させねえよ！今までこき使われた恨みだ！」

「兄貴やるッス！」

「おうよ！艦長、バーストリミッターの解除を！」

やつこやジランとマジは元ロウズ警備船だもんな。恨みもあるのか。

「よし。許可する。そのかわりの」一斉射撃で仕留めや。「おうよー！」

恐らく回避軌道をとつていない相手だ。撃沈するだろ？。

「バーストリミッター解除！全砲塔標準！」はっしゃああー！

ソロモンから放たれるレーザー。

それはテラコンダの船に着弾し、大爆発を起こした。

「インフラトン反応拡散…撃沈です！」

「おっしゃあああーこれが俺の力だああー！」

「兄貴流石ッス！」

ものすごい轟音でジランとマジ

だがジラン、それはお前の力じゃなく、俺のソロモンの力だ！

「さて、邪魔者は消えたねえ。ゲートに突っ込むとするかいー！」

「こよこよロウズから出るんだなー。」

そして期待にテンションあがる艦橋。他の部署も回りだつた。

…だがしかし。

「こやせあは田の壇のトドリ回収するよ。」

「えへ…」

「お前読んでよみ體験…」

俺の一言で落胆する四畳

いや金にならぬし。なによつ…

「マジ、ゲート前で浮いてるのなんだ?」

「なにひトイコハンダの…あー。」

気づいたらしこ。

そう、ゲート前で戦闘したためトドリを回収して撤去しないこと通れないのだ。

死しても邪魔者か、デラコンダさんよ…

「わかつたら早速作業にかかるよ。最低人数だけ残してあとはジユノ一級とアルク級にいくよ。ソロモンでそのままいたら傷ついちまう」

「「「うーす…」」

そんな訳で止止め食ひのだった。

## 2章 ロウズ終幕編（後書き）

オリジナル艦」とソロモン級双胴駆逐艦が出ました。

流石にエルメラーダを使うわけにはいかなかったので（苦笑）

性能としては原作のランキング報酬のグランベイム並みですね。

いきなりの妄想暴走です。

次回はさらなる暴走もあるかも…

### 3章 ラッシャイオ編①（前書き）

ついに来ました。ラッシャイオ編！

わくわくこれからどうなるか…今から期待！

### 3章 ラッソイオ編1

ゼロ side in

「…げ。」

デラコンダ艦隊残骸をジャンク品として回収に2日かかり…いや普通に考えたら早いんだが…ゲートに突入したんだが…

「…えつとシリエット照合完了ッス。スカーバレル海賊団のガラーナ級2、ゼラーナ級1、オルドーネ級1、ジャンゴ級8ッス。全艦こちらに回航中、熱量増大ッスね」

いきなりスカーバレル海賊に遭遇…しかもこっちに尻向けた状態である。

「ついでにその先にボイエン級4隻、サウザーン級1隻、アリアストア級4隻ツス」

「カラーリングからエルメッシア本国の正規軍だねえ。この辺じや珍しいよ。」

…こんなイベントなかつたと思うんだけどさ

「ま、軍人に恩売るのも一興か、ジラン、スカーバレルにぶつ放せ！」

「オーライ！」

こっちにくる前に撃ち込む。

ソロモンのレーザーが火を吹く！

：なんか違うか？

「あ！オルドー、ネ級が避けたッス。完全回避ッス」

「回航中のあの状態でか!?」  
ものすごい驚いてるジラン。

そりや驚くよな。

ロウズではほぼ百発百中だつたんだから

「敵艦から通信。」  
「でもオルドー級以外は全てレーザーの余波で行動不能ツス

敵艦から通信

通信用の画面にオールバッくの男が映る。

『てめえ…』ひちの邪魔いやがつて…次は容赦しねえぞ!』

「次があるとでもお「通信切断されました」  
ちょっと！遮られた！

「しかも足早に離脱されたツス」

にかしたあああめ!?

「今度はサウザーン級から入電です。」

今度は若干体格がいい軍人が写った

『こちらエルメッツア中央政府軍、オムス・ウェル中佐だ。』

援護感

謝する。』

ふむ。それよりの態度で対応してやるか

「いえ。それよりも何故このような地点で戦闘を?」

『うむ。我々はスカーバレル海賊団を警戒してパトロールしていたのだが、たまたま輸送船団を襲う連中を見つけてな。

「なるほど。』

『うむ。今回の礼をしたい。後日ラツィオ軍基地まで来てもらおうか?』

「構いませんよ。』

行つたついでにアーメスタ交渉してやるか。

『ではまた会おう。』

「エルメッシュア艦隊、ボイエン級を伴つて離脱していきます。』

「艦長どうします?ここからならまずはボボスで荷を降ろすことにお勧めしますよ?』

と航海長、

「なりそのよう。ついでにトラクタービームで行動不能の連中も引っ張つていこう。スカーバレルの連中に刃向かつたらタンホイザにぶち込むって入電入れといて』

「了解です。』ソロモン級で引っ張りながらアルク級とジユノー級

で後方から監視する。

無人艦だからできる芸当だよね

んでポポス

ポポスの宇宙港に入つてすぐ、引いてきたスカーバレルの船を売つた。

中の連中にはそのまま港で降ろした。

宇宙に放り出されるよりましだろ。

ついでにアルク級、ジュノー級、ソロモン級に積んでいたジャンク品も引き取つてもらつた。  
あとで精算してもらう。

そして、ポポスにて3日間休暇を取つた俺たちは再び銀河へと旅立つた  
「とりあえずラツツィオ軍基地にいくしかないよなあ……」

「いちお、最短航路を見つけてあるわ。ポポスからラツツィオ経由でいくルートね。一旦ラツツィオに寄航する事をお勧めするわ。」

流石はうらの航海長ヒメさん！そこに痺れる憧れ（ゝゝ

「そいやラツツィオに確かギルドあるんだっけ？」

「そういやあつたね。誰か雇いたいのかい？」

俺の質問に真っ先にトスカさんが答えてくれた。  
確かにトランプ隊がいたはずだが…

「そろそろ科学班と操舵士を雇いたいしわ。」

科学班は仕方ないとしても操舵士は欲しいな。重力下でバレルロールさせるくらいの実力の持ち主いたらしいな…。

「寄航する度に募集はしてみてるけど、まだまだ欲しい人材はあるしね。優秀な人材ならいるに越したことはない」

「確かにねえ。」

そんなこんなでスカーバレル海賊団を撃破しつつラツツィオに寄航する。

今度はオルドー級が捕獲できたけどこいつを解体処理するのに五日かかるそうな。

つまりその間、ラツツィオで休暇である。

その間にトーコやトスカさんを引き連れてギルドにやつてきた。

「…うわあ。」

「袖がなげえな。」

なんか隅に子供いたし。

とりあえず窓口にいくのである。

「すみません。人材を雇いたいのですが…できれば傭兵とか科学者とか操舵士とか…」

「傭兵と操舵士でしたら三番ベースにトランプ隊の方々がおります。」

トランプ隊 k t k r !  
さつそくいってみた。

「…ほほう。あなたが」「若いじゃないか。大丈夫なのかい?」  
いかついおっさんとおばさん…いつたら殺されそ。  
プロネンとガザンやね。

「ども。ゼロつていいます。是非あなた方を雇いたいんですよ。どうですかね?」

「ふむ…フノメナ・ログを見せていただきたい。」

「おつけ。」

別に構わないでログ…航海記録を見せる。  
これは全ての航路、交戦記録が自動記録されている。  
基本的にこれを用意にして品定められるのだよ。

「…」  
「…」

「で、乗ってくれる?」  
ま、多分大丈夫だろ。

「あなたになら我々の命も預けられそうだ。私はプロネン、トランプ隊のリーダーをしています。」

「あたしはガザンだ。久々に腕がなるねえ！」

「お、交渉成立のようだねえ。」

「良かつた良かつた。じゃ俺はトランプ隊の方々を艦に案内するから、一人はどうする？」

「俺は酒場いつてくるか」

とトーロ

「お？ なら飲み比べするかい？」

ヒースカさん。

「おっけ。出航までには帰るんだよ。あと4日あるから大丈夫だろうけど」

二人を見送り、乗艦のため荷をまとめにいつたトランプ隊を待つ間にギルドでさらなる人材発掘をした。

その結果、科学班数人とその筆頭のホロムさん。操舵士のアーロドさん。

彼らを雇う事に成功した。彼らとトランプ隊を引き連れて宇宙港へとやってきた。

「ふむ…しかしどれが艦長のものですかな？」

ラツツイオの宇宙港には  
サウザーン級やオルドーネ級（解体処理中）、フランコ級、ボイエ  
ン級、アルク級があつた。

「ま、オルドーネ級がそつだ。といつても過言じゃないけど」

そのまま1000級以下の船があるドッグから離れ、大型艦船ドッグに向かう。

「彼らの疑念の目線がキツい」

つか大型艦船ドッグもうちのしか使ってないからアルク級やジユノ一級も一緒に入れてるけど。

「これが俺の旗艦にして君たちのこれからのか、ソロモン級双胴空母さあ！」

「」「」「」「」「」

あれ？なんかデジャヴ

「…これはネージリンド…いやネージリッド系列の艦船ですね。空母という事は艦載機も？我々はパイロットですので活躍できますが」

カラーリング変えてるのに見てわかるとか…プロネンさんパネエ！  
「その通りネージリッドのです。いや艦載機は現在ないから、入手できるまでは傭兵の皆さんには教官や訓練積んでもらう事になりそうかな。」

確かカルバライヤで入手できたつけ

でもないよりマシ程度の性能しかないからな…

「ふむ…わかりました。」

「納得していただけて助かるよ。当面は保安局所属だから治安守つ

てね。

「了解だ。あたしらは白兵もこなせるからね！」

卷之三

歓声があがるトランプ隊

「操舵士のアーロドさんとホロムさんは艦橋について挨拶。その後研究室に案内するよ。さてここにだしたります端末がうちの乗員の証ですので無くさないよう!」。

そういうながらスマートフォンぽい端末を渡す。

実はこれ、スマートフォンとかにものすごく近いのに性能が隣の惑星ですらつながるほど高性能。

艦内では財布や身分証の役割もしてアフリも入っている。しかも艦内地図完備で改修の度に自動更新である。

マジパネエ

## 4章 ラッソイオ編2

「ゼロ艦長、あんたまだ宇宙に飛び出してから半年も経っていないんだって？」

誰から聞いたし。

今、ソロモン艦隊はラッソイオ軍基地に向かっている。

…惑星の名前が基地で…

ついでに生活班に人が増えた。トーロの幼なじみのティータだ。お兄さんが軍人だが音信不通という」とらしい。

聞くも涙、語るも涙の話があつたらしく、トスカさんが副官権限で仲間にしたらしい。

…まあワンさんども人手不足などあつたからな。

そして現在、俺はガザンさんとアプロネンさんと共に艦内巡りをしている。アプロネンさんはリーダーとしての先輩でもあるので色々勉強になる。「そうだけど、やっぱり経験が少ない艦長じゃ不安かい？」

「ガハハッ！自治領一つぶした上にランキング上位のガキを不安に思つもんか。この宇宙じゃログがものをいつ。自信を持つこつた。

「うひつす、しかし自治領つぶしたのはまづかつたですかね」

「いやいや、気に病むことはありますまい」  
プロネンさんが小ちく笑い、続ける

「風のウワサで、ヤツのことは私も聞いておりましたからな。多く  
のOGデッキはヤツのことを快く思つていなかつたと思ひますよ。」

「ならむしりこことつたつてどじるかな」

「わうわう」とどすな

豪快に笑つ俺ら三人

その間に食堂についた。

トランプ隊の二人は初の食堂、俺はティータに会いにきたのだ。

「うごすワソさん」

「アイヤー。艦長また来てくれたアルか?」

厨房から顔を出すワソさん

いまはクルーもそんなにいないようで暇なようだ。

「トランプ隊のお二人と来たよ。とにかく新入りのティータとやら  
はいる?」

「いるアルよ。ティータさん? シャチヨさんとおよびアルよー」

そついいながら厨房に戻るワソさん。  
つかなんか色々混じつてる!?

プロネンさんやガザンさんも苦笑まじりだ。

「あ、あの始めまして」

今度は長髪の女の方が出てきた。

「あなたがティータさん?」

「はい」頷く。

イベント通りだとこの方の兄さん、死亡フラグ満載なんだよなあ…

「軍基地では一緒にオムスなどいこべよね? 無分お兄さんのこと聞けるよ」

「お願ひします!」

「食いつきがいい」と…

「じゃ注文頼むよー。俺はラーメン。お一人はビーフすき?」

「では私は炒飯セットとやらを…ガザンはいかがします?」

「あたしも同じやつでいいよ。」

「はー。ではしばらくお待ください…」

注文を受け、厨房へ走るティータさん。

ワンちゃんのは中華がメインである。洋や和も充実させたいところだな…

「オムス中佐ですか… 実は彼とは一度砲火を交えたことがあります… てね。」

「えー？」

「おーおー。まさか。」の、エルメッシュアの中央政府軍に喧嘩うつたんじや…

「いや、まあ…最近ではありますよ。少々やんけやだつた、若い頃の話です。」

「アンタの場合、やんぢやじゅまない話だつたけどね。」

「ふふ…わい、どうでしょうか？」

茶化すガザンやんど」まかすプロネンやん。

本当に仲がいいんだな。

「できたアルよー！」

厨房からワソんやんの声がする。

そして俺たちの前に注文した料理が並んだ。

「ほほう。これはラツツイオでも滅多に手にかかるないものですな。」これは美味しい。」

一口食べて料理を讃める。

確かに美味しい。この腕の料理人がロウズに埋もれてたのは驚きだ。ワンをん曰わく物価が高すぎたらしい。

さて食堂で料理を堪能した後、俺は一人と別れて艦内を歩いた。目指すは格納庫の横にある整備庫。

その近くには科学ラボや解析室がある研究区画となっている。

このソロモン級、拡張性が原作のエルメラーダの倍近くあった。原作だと入れられないところがあつたが、こちらだとかなり入る。

「おや？」

なにやら言ふ争いが聞こえる

「だから！作るんだつたら人型だつがよ！作業用に転用できるぜ！」 整備班長タカギさんと

「否ー断じて否ーやるのであればスピード重視である！戦闘機型にすべきだ！」

科学班長ホロムさんの叫びだわこれ…

うわ。面倒臭いぞこれ…

俺は反転して去つた。

尚、宇宙艦はグラビトン・ウェルにより重力が発生している。  
そのために歩けるのだが、ソロモン級のように2000m級の艦船  
には歩く歩道がある。

たまに空港とか駅にあるアレだ。

ちなみにあとで聞いた話だが、艦載機の開発をしていたそうな。

俺は許可していない。

『ラツツイオ軍基地にまもなく到着致します。艦長は艦橋に起こしぐださい。繰り返します…』

「…や？」

もつりラツツイオ軍基地についたのか。

面倒なんだよなあ。軍人に会うなんてさ...

仕方ないからいくけどね。

そんな訳で艦橋に向かうのだった。

side out

side in

ラツツイオ軍基地

今回はトーロ、ティータ、トスカさんの三人を連れてきた。

守衛の人に一言いればオムス中佐のいる部屋に案内された。

「よく来てくれた。」

入ればオムスに迎えられた、

「改めて自己紹介しよう。エルメツツア連邦中央政府軍、第4方面軍第122艦隊所属オムス・ウェル中佐だ。それとこちらは私の上官のモルポタ・ヌーン大佐」

「…」

無言かよ。

「やして」からは基地司令の……」

「テラー・ムンス、階級は中佐だ。」「

こつちはまだいい人そうだよなあ

「しかし通信でも思つたがまさか、君のような少年が艦長とは……」

「なにか問題でも?」

品定めするように見やがつて…

「いや君のような新しい視点をもつものも必要なかもしねない。君はこの海域の状況をどう見るかね? この海賊がたむろし、したい放題の状況を……」

「そりゃあ中央政府がだらしないんじやないの?」

トーロがビシッと言つなあ。

「ま、本当のことだね」

頷く俺

「む、そつこわれると返す言葉がないな……だが今は連邦全域が非常に不安定なため、軍も手が回らないのだよ、」

「んで?」

「つむ。君たちの腕を見込んで海賊討伐に協力して欲しいのだ。もちろんこちらで用意できる限りの報酬も用意する。」

「……」

美味すぎる話だな

「おこしご話だけど、軍の一員として扱われるのはしゃくだねえ。」

「……やんなつもつはないのだが…」

よし…案は決まった。

「なら報酬はグロスター級とアーメスター級の設計図、あと金ね。それと海賊のジャンクとかの入手も許可してほしい。」

…そして何故か静まる

…静まる?

「…ゼロ。あんたねえ」

トスカさんが呆れてる、

「君は度胸があるのだな…」

「むしろ当たり前かと。」こちらはクルーの命を預かつてゐる身です。ただ軍の露払いにつかわれる訳にはいきませんから。」

一息ついて、さらに続ける

「それと、」ここにテイータのお兄さんが軍人だそうで、音信不通らしいのです。なにかご存知ありませんか?」

「ふむ…そのお兄さんの名前と所属は?」

「所属はわかりません… けど名前はザッカスです。」

「ほう！？ 君はザッカス中尉の妹さんなのか… オムスの声変わったよ！？」

「驚いたな… ザッカス中尉は今、スカーバレル海賊団に潜入している。奴らの基地に攻撃に向かうのだが、本拠地がわからなかつたため、他の数人の部下共にスペイにいつてもらつていたのだ、しかし彼のおかげで本拠地も見つかつたのだよ」

あれ？ 確かザッカスに会いにいくはずじゃ…

イベント飛んだ？

「それと報酬だが君たちに戦力の増強もして欲しいため、先にグロスター級を渡しておこう。空母と駆逐艦だけではなにかとキツいだらうつ。」

うちの空母はチートだけどな。

グロスター級は拡張性も高いし、ペイロードもあるから輸送戦艦として使えるな。

「奴らの本拠地は暗礁海域の奥にあるらしい。暗礁海域はレーダーの効果も半減するからな。隠れ場所として申し分ない。グロスター級をこれから作るとして完成まで1日はかかるだろう。出撃は2日後を予定するつもりだ。」

「構いません。では我々は失礼します。」

「つむ。よろしく頼む」

さて、軍基地から出た俺たちは一旦ソロモン級に戻った。

事情を説明したら艦橋メンバーと各班長は俺の判断を支持してくれた。

そしてジユノー級を売り払い、ソロモン級、アルク級を改装、グロスター級の造船を始めた。

ソロモン級以外は完全な無人艦にするため、CICO...コントロールユニットを搭載。

ソロモン級にはそれ兼統合型AI機能付きのものをつけた。ついでに艦長室も導入。

書類仕事せにゃならんのよ…

「つは…テラ面倒…」

新品の部屋の中にある『スクの上には、大量の書類が…

つかこればかりは旧式なのな。え、改竄防止のため?マジすか。

「ま、やるしかないわな」

『頑張つてください!』

「おつ…え?」

…今声した?

「…疲れてるんかな」

『え? 頑張らないんですか?』

『 … ? 』

「 … ふう。 」

よし。OKOK。クールダウンや。

とつあえず深呼吸して…

女の子の声聞こえたね。しかも自分以外誰もいない部屋で…

「 … みや あああああ ! ? 」

『 … 』

「 幽靈怖い幽靈怖い幽靈怖い幽靈怖い幽靈怖い幽靈怖い幽  
靈怖い幽靈恐い幽靈恐い幽靈恐い幽靈恐い幽靈恐い幽  
靈恐い幽靈恐イ幽レイ恐イ ! コ  
ウレイコワライイイイ ! 」

『 ひょーー艦長おひつ … 』

「 ヒ ゃあああー堪忍してえー祟りんとこてー呪わんとこてえええー 」

『 幽靈違こまますよー 』

「 なら地縛靈 ! ? 呪怨 ! ? ツイツヤアアアアア ! 」

『 かんちりょおおおー 』

そして俺が落ちついたのは一時間くらいたつたあとでした

でだ。

「…統合統括型AIさんなの？」

『はい。先ほど起動しましたので、まずは艦長に挨拶を』

「おつけ。しかしいきなり初めての相手に声かけるのはやめとこうな？」

マジ幽靈かと…

『はい。』

「一応みんなに紹介の文章いれとくから。仲良くな。…名前はクオーツな」

端末をいじって搭乗員全員にメールを送る

確か石英の英名…だっけか？

『はーー！ありがとうございますー。』

「ん。いい返事だ。」

娘持つた気分だね。

「セヒト、時間も過ぎてしまったし、やりますか！」

『はー艦隊ー』

そして俺はクオーツの声援を背に書類と格闘を始めた。

## 4章 ラッシャー編2（後書き）

今回登場しました統合統括型AIはQOLOさんから許可をいただいている

許可していただきて本当にありがとうございます！

## 5章 ラツツィオ編3

第三者視点

サウザーン級オムス搭乗艦

時刻になりサウザーン級の観測用レーダーには宇宙港付近にて待機する巨大空母…ソロモン級が率いる部隊を捉えていた。

「…では我々も出撃致します。」

「後武運を。」

通信越しに声を交わすオムスとテラー

テラーの脇にはモルポタもいた

「戦果を期待しておるよ。オムス中佐」

「はつ。」

オムス乗艦艦は他のサウザーン級やテフィアン級、アリアストア級、アーメスター級を率いてラツツィオ軍基地から出航していった。

そのままソロモン級艦隊の前面に出て、彼らを率いる形で暗礁海域に突入していった。

ゼロ side in

「…砲雷班、レーダー管制班、警戒厳に。」

「え？でも警備が手薄なルートを進む話だつたんスよね？それならそんなに警戒する必要ないんじや…」

「わうだよな。それに軍艦も一緒なんだぜ？」

「いつとくナビ、軍艦よつつのレーダーのまつが性能いいからね？」

「それでもさ。宇宙じゅなにがあるかわからんよ？クー、グロスターを前面に、アルク級は左右へ移動」

『了解です。』

クオーツの愛称はクーになつた。もともと短いのこちりこ短くなつたぜ

「確かに、彼らはスパイからもたらされた情報を信じている。艦長の言つとおり警戒しておいても損はないでしょ。」

んで軍との共同戦線かつ海賊との正面衝突だ。

戦闘アドバイザーとして今回はプロネンさんにも艦橋に来てもらつた。

ズドーン！

「な、何事だい！？」

「トスカさん落ち着いて……シアンさん報告！」

謎の爆音が聞こえた。そつにえは襲撃されるイベントあつたつけ？

「我々の艦隊ではありません！前方のオムス艦隊のテフィアン級、轟沈！」

「け、けどレーダーには…反応なしッス！」

「プロネンさん。どう見る？」

「…ふむ。恐らく暗礁に隠れて質量弾頭を撃ち込んできたのでしょう。」

「なに冷静になってるんだい！？軍の哨戒船はなにしてたんだい！」

「こんな暗礁海域じゃ敵の感知は無理っスよ～！」  
おつけ。トスカさんを含めて落ち着け。

「本格的に攻撃を仕掛けてくるなら暗礁から出でてくんでしょ。」

「うん。ジランさん、身体を出した奴から艦中央主砲で攻撃！各側面主砲は左右から接近する艦を警戒！現れ次第撃てッ！」

「了解だ！」

ソロモンの艦中央のレーザーが火を吹き、現れつつあるガラーナ級

やジャンゴ級を撃破する。  
しかし数多いな…

「うわ！本当に出てきた！しかも囮まれてるつス！？」

「サウザーン級より通信ー。」

『ゼロ君！聞こえるか、ゼロ君ー。』

オムスさんから通信キターー！

「とりまオムスさん落ち着いて。」

『う、うむ。…』の場の連中は我々が引き受けた。君はバルフォスを目指すんだ。ヤツさえ倒せば他の連中も戦意が消失する！』

「了解。死ぬんじゃないですよ。」「通信が切れ、俺は息を吸う。」

「マドさんー包囲が手薄な地点はー！？」

「正面つスー・ガラーナ級四隻ー。」

「ジランさん！正面に全砲門一斉射、蹴散らせッ！クー、グロスター級からも放てー！」

「オーライー！」

『はいー。』

ソロモン級とグロスター級から一斉にレーザーが放たれる。それは前のガラーナ級を安々と貫き破壊した。

「よし。目標に最大戦速で突っ込めー！」

「了解だぜ艦長！」

「アールドさんが操るソロモン級とそれに連動する艦船は包囲網を突破した。」

「強襲に用いた艦隊があの数です。恐らく残っているのは直衛の艦隊とバルフォスの艦でしょう。」

「なら好都合…。」

全主砲ぶち込むのみ！

「…！右舷に反応あり！オルドーネ級3、ガラーナ級4隻、ジャンゴ級5、ゲルドーネ級1！ゲルドーネ級を中心に展開つス！」

「また強襲か！好きだねえ。」

トスカさんだいぶ落ち着いてきたね

「全艦回頭！」

「実体弾キタッス！」

「やにや…？」

次の瞬間、艦に振動が走った。

「さや！左舷の無人区画に着弾！あ、穴開きました…。」

「うにゃ」「やー?」

「さりにアルク級一番艦中破、グロスター級も機関部に被害拡大!」

「」「や、『やん』ですとー?」

「うわ、まともに動けるのアルク級一番艦とソロモン級じゃないか!」

『「うわーん、傷つきましたあー!』』

あ、クーはこの艦そのものだもんな。

「回頭完了! 敵艦隊の正面だ!」

「グロスター級は回頭にあと3分かかりますが、各砲撃でます。」

よし…

「撃て!」

「オーライ!」

再び火を吹くソロモン級艦隊

その一斉射でオルドー・ネ級やガラーナ級を潰す。しかし…

「暗礁を迂回してジャンゴ級接近! 次射発射まで間に合いません!」

「まあいですね。暗礁海域での戦いに慣れてます。」

まつずい。本氣でまつずい。

デフレクター積んでおけば良かつたなあ。シールドモジュールでレーザー対策しかしてなかつた

「俺、この戦い終わつたら全ての艦にデフレクターコニット積むんだ…」

「変なフラグたてんじゃないよ…」

トスカさんに怒られた。

ふひひ。せーせん。

「…あれ？ ジャンゴ級轟沈？ 次々と撃破されます…」

「「え？」」

「敵のオルドーネ級からの砲撃つス。次々とジャンゴ級が落ちてるつスね」

「どうやら軍のスパイが乗つていいようですね。バルフォスを撃つチャンスですな」

おーし！

「ソロモン級を前に出せ！ 全主砲発射！」

「オンライン！」

相手のゲルドー・ネ級も前に出てきた。

しかし、ついに三発の主砲レーザーがゲルドーネのミサイル発射管を貫く。

「ミサイル発射管に直撃！あ、誘爆しました。」「たまや～！」

誘爆したようで敵艦は爆発に包まれた。

「あ、敵艦健在、宙域から離脱を図ります。…うわ早…」

砲撃する間もなく、ゲルドーネ級はミサイル発射管をページするとどんどん離れていった。

直衛の艦隊もそれに続く。

残っているのはオルドーネ級だけだ。

「オルドーネ級より入電。スカーバレル本拠地の宇宙港にて中央政府軍を待つ。との事です。」

「よし。じゃうちらも宇宙港で待たせてもらおうじゃないか。グロスター級やアルク級は修理が必要だしねえ」

「そうですね。では私はこれ以上いても邪魔になりますし、退室します」

「あ、プロネンさん！」苦労様でした」

艦橋から出ようとしたプロネンさんを呼び止めて礼を言ひ。そしたら笑顔で答えてくれた。

『かんちょー。』

微妙に涙声なクオーツ。

いや感情豊かだね。

「安心せい。宇宙港で修理するからさ。」

宇宙港ではドロイドが無償で艦船の修理してくれる。

解体費は取るのにな。

「ついでに基地に当面留まるつか。色々探検のしがいがありそうだ  
し。」

そう思いながら俺たちは基地の宇宙港へと侵入していくた。

宇宙港はあるが、基地自体は人工惑星… 宇宙ロロニーみたいなもの  
だ。

実験開発何でもし放題。

しかもこれをジャンクとしてしまえば好きに出来るな。

…ま、一応交渉せねば。

艦からトランプ隊や保安局、トーコとトイーダとともに降りるとそこにはスカーバレル海賊団がいた。

「艦長！」

「ゼロ！あぶねえ！」

プロネンさんとトーコが前に出る。

「おいおい、そんなに警戒すんなよ。こんな格好だが俺らは軍人だぜ？」

「あ、スペイのか。」

「そうだ。俺はティゴ、あん時は世話になつたな。」

あの時……？

「わからんねえか？お前らがゲートから出てきた時だよ」

……あー！

「あん時のオルドーネ級の！？」

「そうだ。あん時は戦闘どこまかしての情報交換してたんだがな。」

「あいや。じや邪魔しちまつたか」

しかし豪快に笑うティゴさん。

「なあに。結果的に強力な味方が手に入つたんだ。結果オーライだる」

「あはは……」

苦笑いになるわこれ……

ま、軍人に目つけられたのは変わらないか。

「ところでザックカスをひどい？」

俺の一言でティータがピクッと反応する。

ま、お兄さんが心配で来てるんだしな。

「ああ…ザックカスなんだが、ちと洗脳されちまつてな。うちの船で治療中だ。ただSERVOSを使われたようでな…どうにも時間がかかりそうだ。」

「そんな…どうにかならないんですか？」

「大マゼランの技術だからな…こればかりはびづてもならない。

大マゼランの技術だからな…こればかりはびづてもならない。  
大マゼランの技術だからな…こればかりはびづてもならない。  
てかバルフォスはどうやってそんな技術手に入れたんだ。「ま、いつか俺たちが大マゼランにいって薬とつてくれればいい話だろ？」「うん。」

ティータを慰めるトーロ

だがトーロ、俺は大マゼランいくとはいってないぞ?…いやいつかはいくけどさ。  
しかしまたイベント壊したか。これってバグか?

「そりいえばスカーバレルの連中がいないね」

「ああ全員で迎撃にてたからな。基地内部には非戦闘員しかいない

よ。」

「ゼロ君！」

他のブロックからオムスさんがやつてきた。  
走ってきたようだが息が荒くないとこにはさすが軍人だなあ

「良かつた。無事だつたか」

「そちらも『無事のよつで…』

「ああ、君たちがバルフォスを倒してくれたおかげで海賊の士氣も  
低下してな。ほとんど逃がしてしまったが、この海域から撤退させ  
られたよ。」

「だがオムス中佐、ラツツイオ軍基地のテラー中佐がバルフォスに  
買収されてやがつたんだ。」

「…やはりテラー中佐か。」

どうやらどこかでテラーを疑っていたオムスさん。

しかし軍人が海賊に買収されるつて…

「世も末だな。」

「そうだなあ」

なんかのほほんと、し始めた俺とトーロ。

「ラツツイオ軍基地所属のザッカスはスペイとバラされ、SERVO  
SSTでコントロールされちまつてな。」

「やうか…。」

「ま、とにかくバルフォス艦隊は壊滅した。あとはテラーを捕まるだけだ。ラツィオ軍基地に急行すべきだろ。」

「やうだな。」

いや軍人で話進んでるナゾ、いつの事者えてもらわんと…

「こやうちの艦、損傷が酷くてすぐには無理ですか？」

「ふむ。ならば今後、我々も中央海域に戻らねばならん。君たちにもやりたい事があるだろ？から、ツィーヴロンドの軍司令部に来てほしい。そこで報酬も渡そ。」

「了解です。」

ああ…めんどくさい臭が…

絶対なんか頼まれる系だろ。

そのあと、俺たちから離れるオムスさんとティゴさんは非戦闘員は回収したとか、造船工廠がまだ使えたとか話していた。

## 6章 ラッソイオ終幕編（前書き）

今回はパロネタとしてあれが出てきます。

ではラッソイオ編最後の話！

始まります。

## 6章 ラッソイオ終幕編

さてさて、我々以外無人の人工惑星に留まつた我々ソロモン級艦隊だが…

「おーし！そつちのラインで可変フレーム用に転用出来るから持つてこい！」

「そちらの小型艦砲のラインは使えるのである。グロスターに運び込んでもほしい。」

「…なんでこいつなつたし。」

グロスター級が整備班と科学班の巣になつた。

その様子をソロモンの艦橋から見ていた。

ソロモンの横つ腹に開いた穴は宇宙港のドロイドが直しつつあった。

アルク級も修復しつつあるのだが、整備班によれば毎回損傷する宇宙港までにたどり着けない場合にも発展してしまうらしい。そのためペイロードと拡張性が高いグロスターをファクトリー・シップとして改装…いや改造しようという事になつた。

ソロモン級双胴空母から転用した技術と基地内に何故か出撃せず放置されていたゼラーナ級とそのその予備パーソンを使って重力カタパルトを増設。無理やりつけたため、艦載能力はゼラーナ級と同程度だが、本来はソロモンに艦載機を載せるので問題ない。

そして格納区画の裏に艦載機や資材の加工、製造が可能な工廠区画

を配備。そして倉庫を大量配備…といつ感じである。

じいがあるため、無人が基本になつてゐるが、一応泊まつて作業で  
きるよつてある程度は居住区画も配備している。

そしてアルク級一番艦二番艦も輸送艦とグロスターほどではないが  
工廠艦として使えるよつて改造中だ。

ただや、グロスターに運んでる連中のセリフが気になら  
マッジじゃねえのか？あいつら？

『以上が拾つた音声です。』

「ありがとう。クー」

うちのAI様は優秀です。

ちなみに現在、艦橋には俺しかいない。

ロウズ出の皆とトスカさん、ティータは探索にいく保安局員とトラ  
ンプ隊についていった。

許可してあるので問題ない。

ま、全員いなくなる訳にやいかんから俺は残つたんだけどね。

他にいるのは内務があるものだけだ。

ちなみにワングさん一家は生活班と共に備蓄倉庫に見に行つた。

「しかしテラーも往生際が悪いな。」

『そうですね。オムス中佐達が帰る途端にすでにいないとは。』

実はオムス中佐が出航してから半日後、メールで報告があつたのだ。

急いで帰還した時には既にテラーの姿は無し。逃亡した後だつたらしく、どうやらバルフォース艦隊に合流して中央宙域に向かつたらしい。

ラツツィオ宙域は安定しつつあるためすぐにツィーズロンドへと帰還したらしい。

とはいえるバルフォースの残党はまだ残っているため気をつけるようだと、最後の文に付けられていた。

『あ、艦長、プロネンさんより通信

正面の画面にプロネンさんが移る

『艦長、実は見ていただきたいものが…』

プロネンさんが画面から消え、ある物が映る。

…毎度思うんだが、スカーバレルってなんでこんなすごいもん。持つてるんだ。

「はあ…ちといつてくるけど大丈夫か？」

『はい。私はこの艦自身ですか。』

仕方なしに艦長席から離れて艦から降りた。

そしてそして

スカーバレル基地。格納区画

「SERVOSといいコイツといいバルフォースって大マザランにつ  
た事あるんかな…」

「さて、それはわかりませんが…」

困惑顔のプロネンさんと俺。

なにせそこにあるのは…ネージリッド製エルフレア、プロミオン、  
ペルメオスの前身というか試作機というか…ムーブアーム構造の四  
肢を持つ半人型機が存在した。

めっちゃ「コード繋がれて改装とかデータ吸い出しがされた途中だったらしい。

「整備班長と科学班長にも報告しましたが、遅いですね」

「報告しちゃったの?...」

「「あた」であるー」

顔を真っ赤にしてやつてくるホロムさんとタカギさん。

「！」これは！使える！使えるぞ！」

「これを分解して調べればムーブアーム構造を解析できるのであるー。これで作れるである！タカギ！」

「おー！」こいつをグロスターに持つていく...いやーいやーもー...持つていく時間すら惜しい！」

「否ー、グロスターの格納区画であればより詳しく解析可能であるー。」

なんか蚊帳の外のプロネンさんと俺。

「他いこつか。」

「そうですね。」

一人を残して戻る途中、整備班と科学班とすれ違った。

第三者視点

ゼロ達がスカーバレル基地に留まって一週間。

グロスター級改め、グロスター／fsことグロスター改、アルク級改めアルク／fsことアルク改の改修が終わり、グロスター改の内部では一機の艦載機が製造されていた。

それは旗艦のソロモンを思わせるような漆黒のボディ、細身であり、各所の先が尖つており、左腕には全長に近い長さの砲を持つ全長16.8mの人型兵器。それは内部にじしを搭載可能になつており、今グロスター改から出撃。

大型艦船格納庫を飛び回り、戦闘機のような形に変形した。

それをゼロ達はソロモンの艦橋から見ていた。

『見てくださいー！艦長！見てくださいー』

嬉しそうなクオーツの声と共に…

side out

ゼロ side in

「どうであるか！新型艦載機、トーラスの実力は！」

「武装はトーラスカノン一門だが、駆逐艦主砲並みの威力…とか  
か主砲を転用して作つている」

ホロムさんとタカギさんの説明が聞こえるが、飛び回るトーラスに  
目が釘づけだ。

見た目は完全にONのトーラス。

性能もトーラス。

本気だしゃ、8Gの加速可能かよ。

しかもここでモビルドールシステムも再現してる。

「ちなみにであるが整備班はこれをベースにした人型兵器を」

「科学班はこいつの変形後をベースにした哨戒機を考えてるらしく」

…まだ開発続くんかい。

ま、早くに艦載機出来たから構わないけど…

「一つ聞くけど勝手に試作機作つてたりとかしてないよね？」

「…」ピクッ

「…」ビクッ

固まる一人。

…え？ なにその反応？

「…あるんだね？」

顔を逸らす一人。

「…見せなさい。オコラナイカラ！」

この後、若干記憶消えたが、ガタブル震える一人を引き連れ、いまだに使用用途のなかつた格納庫へとやつてきた。

そこにあつたのは…

「…トールギス…だと…」

左腕に持つは装着式大口径のライフル、右腕には大型シールド

頭にはグラサンのようなカメラアイ  
そして重厚なボディに大型スラスター

シールドだけ？のものがそれ以外はトールギスだ。

「いや、名前は決まってないんだがな」

「タカギとともに作つてみたであるが、大質量のものを無理やり飛ばす仕様になつてしまつたため未起動のまま放置である。やはり黙つていたのはいけないのであるな。」

気まずそうにするタカギさんと落ち込むホロムさん。

まあ確かに黙つていたのは悪いが、予定より早く艦載機入手出来たしな。無人運用可能なのも気に入つた。

「うし。トーラス採用。」

「は？」

「え？」

驚いて「ちびりを見る一人

「本来は賞でも報酬でも渡すべきだらうけど、勝手に艦載機作って報告義務怠つてるから帳消しだね。一機分だし」

途端に輝く一人

「これからはちゃんと報告頼みますよ？お一人さん」

「「はい！」である！」

うし。いい返事だ。

「じゃトーラスの訓練シミュレーションの開発とこのトールギスをグロスター改にしまつ事、この仕事を頼むよ。」

俺は少年のように輝く表情の一人を置いて艦橋に戻った。  
「あ、ゼロ、備蓄倉庫の物資積み込み終わったよ。後いろんな部品とかも詰めるだけ詰んだしねえ」

艦橋に入るとトスカさんが出迎えてくれた。

見れば皆出航の準備が出来ていたようだ。

「なら一時間後に出航、ヒメさんが出した航路通りにラツィオ軍基地とリードを経由してエルメッシュ中央海域に向かう！」

「「」解…」「

『艦長〜？見ています？』

「うわあ！いきなり近づくんじゃないよー。」

トーラスがソロモンの艦橋の前に着地し、トスカさんが驚いた。

ま、トーラス操るクオーツにしてみたら自分の身体みたいで嬉しかったんだろう。

「トーラスをグロスター改に置いて戻ってきてなさい。もうこくよー。」

『はーい。』

そしてグロスター改にトーラスが戻る…と思いきや、ソロモンから出されたトールギスを掴んで運んでいった。

「…まあいいか。」

そう呟く俺だった。

そして一時間後、ソロモンは出航、その後にグロスター改とアルク改が続く形になつた。

ちなみにグロスター改に整備班の一部（タカギさん含む）と科学班が乗り込んでいるため、今は前線張れるのはソロモンだけとなつている。

まあいる海賊は雑魚だらうし、問題ないだらう。

まずはラッソイオ軍基地にいき、ジャンクを売り払う。

新品同然だったためかなりの金になつた。

ラツツイオ軍基地を出る前にはグロスター内で訓練シミュレーターが完成し、戦闘シミュ室のモジュール共々ソロモンに配備した。そしてグロスターにトラス製造に必要な物資を運び込んだ（整備用品として無料で貰えた。懐がデカいぜ。）ため、航行しつつ製造、随時ソロモンに配備している。

そしたらアプロネンさんとガザンさんが専用機を作ってくれと科学班と整備班に頼んだらしく、通信機器を増設。背中にレドームを積んだトラスとカノンを二丁積んだトラスが格納庫に増えていた。

2つともそれぞれのパイロットの要望らしい。

ついでにグロスター改には哨戒機としてビトン改が積んである

エルメッシュで使われている艦載機ビトンにレドーム他、じゅうや通信機器を積んだ偵察機だ。

科学班が筆頭となつて開発したらしい。

そんな訳で…

「今日もやつてるね。飛行訓練」

ソロモンの周りをトラスが飛行形態で飛び回る。トランプ隊が乗るトラスはもはやその手足の延長上として自在に使われている。

ただガザンは若干不満らしく、もつと火力が欲しいんだそうだ。ま、その辺は科学班に任せるとして…

リードを出発すればいよいよエルメッシュ中央畠域だ。

まともに戦えるのはソロモンとなつた今、早いとこアーメスタを手に入れねば…

## 6章 ラッシャイオ終幕編（後書き）

ぶつかって一ラスであたりで楽しんでた、後悔はしていないっす！

## 7章 激闘編1（前書き）

ほぼオリジナルの話となります。

## 7章 激闘編1

ゼロ side in

リードで補給したあと俺たちはゲートを通り抜け、エルメッシュ中央宙域へと入った。

そしてパルメラで休息を取つた。

なにがあつたと言えば酒場でメテイックの事を聞いただけなので省略

そしてやってきました。

ツイーズロンド！

「面倒な匂いがする……いきたくなえ……」

「仕方ないだろ？あんたが報酬求めたんだから

「無償だつたらトスカさん怒るでしょ？」

「当たり前だろ？」

俺はトスカさんを引き連れ、政府軍司令部に向かっていた。

入り口でオムスの名を出したら簡単に通された、

「おお。待っていたぞゼロ君、とつとうロウズからこなまでやってきたな。」

「つす。皆に助けられた結果ですよ。」

「つむ。船乗りとはそつして航海するものだ。仲間の助力を恥じる必要はないぞ。」

大きく頷いて話すオムス中佐

心なしか嬉しそうだ。

「とこりでだが…君たちの力をまた借りたいのだ。」

ほらきた面倒が。

「…それは報酬の条件として…ですか？」

「いや、君たちの活動を聞いていてね。軍からの依頼として海賊狩りをして欲しいのだ。」

「海賊狩りかい？」

まあうちのは輸送業より海賊討伐がメインだしな、別に構わないんだが…

「うむ。実はバルフォスのものらしき艦船がファズマティに向かつたと報告がある。」

「他のスカーバレルの基地に逃げ込んだという事ですか？」

「つむ。」

オムスが指示すると宙域の画面が出てきた。  
オムスはそのうちの辺境に浮かぶ人工惑星だ。

「ここがスカーバレル幹部、アルゴンのファズマティだ。戦力を失つたバルフォスはアルゴンと合流するつもりだらう。掃討に協力してくれるなら報酬も増やそう。それと…」

まだ続くんですかい！？

「君たちにしか頼めない…私個人の頼みだ。ある自治区同士の紛争を止めてほしい。」

「へ？ 軍派遣すれば簡単に終わるんじや…」

いきなりムードが暗くなつた、そこを軽快にブレイクしたい！

「いや軍は自治区には介入できないんだよ。しかし、何故あんたがそんな事頼むんだい？」

「じつはな…私の那一方は故郷なのだ。故郷が戦乱を起こすのを見るのは忍びない…だが私は軍人であるがため、表立つてなにもできないので。なんとかしようとティゴを調査に向かわせたが…それくらいしか出来なくてな…」

「…ふむ。」

「上と相談し、軍によるファズマティの調査を遅らせたりも出来るのだが…」

一度スカーバレル基地でおいしい思いしてゐるこりうとしては捨てが

ないなあ…

…つか結果的に軍に奪われるなら売ればよくね?

「…うし。ならファズマティをこちらが入手して軍に売るって事はどうですか?」

「あんたまた軍相手に交渉する気がかい?」

また呆れ顔のトスカさん。

「だつてスカーバレル倒したらその後は所有者はいない。なら俺が奪つたとすれば所有者は俺になる。違いますか?」

「ふつ…はははは!」

笑い始めたオムスさん。壊れたか?

「そんな事いうのは君が初めてだ。そつだな。確かにその通りだ。人工惑星となれば我々としても利用価値がある。いいだろう。紛争を止めてくれたらファズマティの購入を約束しよう!」  
手を差し出し、握手を求めてきた、

「気前いい人は好きですよ。」

俺はそれに答え、握手する。

「さて私の話は以上だ。」

「ふう…報酬をもうははずが仕事が増えたね。」

「パーよかマシでしょ？それに元々海賊は狩る予定だつたし、また人工惑星で好き勝手出来るんですから、」

「ま、そうだねえ」

ため息まじりに納得してくれたトスカさん。

「すまない。私のできる限りの礼はしそう…さて報酬だが

あ、忘れていた。

こっちメインだつたな。

「まずは礼として円滑に艦隊を運用するデータだ。エルメッシュア中央政府軍で大隊規模まで使える代物だ。」

「それは嬉しいです！」

大隊率いるとかいいよ！カッコいいじゃん！

「そして報酬の3000Gとアーメスタ級の設計図だな。これは君の所望したものだ。」

そして俺は設計図とGが入ったデータチップを受け取った。これを端末に入れることでやりとりできるんだよね。

「ではまづは惑星ネロにゴーティゴがいるので彼に情報を聞いてくれ。」

「つす。では」

俺とトスカさんはオムスさんに見送られて行った。

まずは惑星ネロ…にいくまえにアーメスタ級を作る。  
敢えて漆黒に色を変えただけのアーメスタ級だがシールドモジュールやデフレクターを装備させた完全な戦闘駆逐艦である。

まあ相も変わらず無人運用のためじつは装備かつドロイドの運用である。

それを四隻、まあこんだけあれば敵なしだろ。いまの時点でも敵なしだが…

続いて惑星ネロに到着した俺たち。

酒場にいるトイイゴさんとメガネ小僧がいた。

…なんだっけ…いつ?

「よつす!」

「お、来ててくれたか。また世話をなる…」

挨拶を交わす俺とトイイゴさん。

トイイゴさんの格好がスカーバレルのままなんて突つ込まないからな。

「ま、とうあえず仲間にして欲しいやつがいるから紹介させてくれ。

「

「イネスだ。生まれは、ヨッソ。よへじへ

偉そうひいてばかりて面白紹介するイネス。

あ、そうだ。こいつイネスだ。

「ところで僕はどこに配属されるのかい？操舵長かい？航海長かい？まさか君の副官かい？」

は？なにってんの？

「…『ティゴ』さん。」こいつクビ。

「なに！？」

いやそりゃそうだろ。

「仮にもこいつは雇い主です。なのにこの態度、かつ自分の位置を高望みしそぎ、いくら人材不足でもこいつは雇えないですよ。」

みくだされちゃ構わんよ。

「いや…だがしかし

駄菓子菓子もない！

「配置するな、アバウト端です。それは軍でも同様かと思いますが

「たしかこうひじゅ無理だが…あ、いやいや」

本音でたね。つまりやつかい払いだつた訳だ。

「…こやじめん。ゼロ艦長…確かに悪かつた」

いきなり謝られても困る件

「なんだいきなり。そんな事いつても乗せんよ?」

「こやじめのは試せしもらつたんだ。民間船じやいきなり素人を重要な部署に配置する事もあるからね。それじゃ乗る側としても信用できない。」

「…一理あるな。そりやう」となじりつか。で、君はなにが出来る?

「…俺空氣」

「イヤゴさん黙つてひつじやーー!

「航海のための知識は持つているし、海域図を見るのは得意だ。それにこのあたりは庭みたいなものだしね。」

「ふむ…」

俺は端末からクオーツを呼び出した。

『艦長なんですか?』

「すまんけど人材みつけたから登録頼むよ。配置は…航海士でヒメさんの補佐

『了解』

「… どうわけで君はこれからいつの航海士だ。よろしく…」

「ああー。」沙良もようしく頬むよー。」

俺とイネスはがっちり握手した。

「…」ほん。もし話入つていいか?」

「あ、ごめんティゴさん」

今まで空氣だつたティゴさん

よつやく本題にまじれそうだ。「で、なにをしたらいい?」

「紛争を止めてほしいんだが、なんとか中央政府軍が介入出来る理由を作つてほしいんだ、そのためにある軍師を探してほしい。」

ティゴさんは自分の端末からある爺さんの写真を出した。

「ルスマアン・アルファン・ロエン、かつて軍にいた伝説の戦略家だ。軍をやめてからは何故か軍人を避けていてな…」

まあやめてから理由つけて利用されるのも嫌だひつしな。

「ラツツィオ畠域で見たといつ情報があるんだが、いつてくれるか。

「

「ま、仕方ないですね。では早速出発します。」

そして俺はイネスを連れて艦に戻りラッシィオ宇宙域に戻る準備を始めた。

この時、あこつい出合つとは夢にも思わなかつた

そしてそして

ゲートを抜け、ラッシィオ宇宙域に入ったソロモン艦隊は、そのまま惑星レーンに向けて航路を取つていた。

「しかしながらレーンなんだい？」

「軍に関係がなくてなおかつ、今まで行つたことがない惑星だかられ」

といつのは建て前で、ルー爺さんが惑星レーンにいるだらうとわかつてゐるので直行してゐるだけです。ゲームの知識で！

「ん？…ソロモンに単艦で接近する艦船ありつス。…んなあー？」

「どうしたー？」

驚くマジさんの声に艦橋の視線が集中する

「有り得ないっス！接近中の艦船のサイズが…ソロモン並み！2000m級つス！レーダーいかれたつスかあああ！？」

驚愕と悲鳴が艦橋に瞬く間に広がっていく。

そんな中、俺とトスカさんは冷や汗かいていた。

『映像でます』

クオーツの声（オペレーターはいま驚きすぎて声でない）が響くとメイン画面に接近する艦船が写った。

そこには三連砲が備わった。巨大戦艦。あるものは恐怖し、またあるものは憧れる。

それは…

「グランヘイム…大海賊、ヴァランタインか…」

まさに恐怖そのものだった。

## 7章 激闘編1（後書き）

ついに出てきた。大海賊。

果たして、遭遇してしまったゼロの運命は……？

ゼロ「眼帯もいいかもなあ……」

！？

**8章 激闘編2（前書き）**

オリジナル編次話です。

ゼロ side in

「砲雷班！絶対撃つな！操舵班！全艦停止、機関班はいつでも全出力出せる準備！」

「「う、了解！」」

まずいな。こんなイベント知らなーぜ。

「シャンさん。保安局に入電。白兵に備えろとね」「はい…」

「ゼロ…白兵になると悪いのか…？」

「いいや。けどあちらから出てきたとこいつとせりがりがあるところ事だの。…これから交渉モードにならね」

「え？ ああ…」

まあ田村は俺のHPCタフだらけ。あこつい狙つてるだらうからなあ…

ひとつと捨てれば良かつた。

「グランベイムより通信…」

『坊主、てめえがゼロか？』

画面に現れたのはいかついダンディーなおっさんだった。

「さうだ。で、あなたはヴァランタイン?」

『おひよー。まずはめえが持つ大事なもんを頂こうか!』

「通信切れました…」

「グランヘイム接近!これは…ソロモンに取り付かれるつス!」

「マジで白兵挑んでくるか…保安局に入電、接触箇所に集めろ!パイロットは搭乗機にて待機、下手に挑発してぶつ放されても面倒だ。迎え撃つぞ!俺も向かう!」

「ゼロ!」

俺が艦長席から出ると、トスカさんが呼び止めた。

「持つていきな!」

トスカさんが投げ、それを受け取る  
それは鞘に入った刀だった。

それは…

「スクリフブレード…」

「接近戦なるかもしけないんだ。あの指揮は引き継ぐから思いつ  
きりやりな!」

「おう!..」

そして俺は艦橋から出た。取り付かれた接点はちょうど倉庫用エアロックがある地点だった

そのためその近くの倉庫にはトーキーを筆頭に保安局員総勢100人がずらつと…寄港のたび人員募集はしてたから400人ほどの総員の4分の1が保安局員なのは多いか。これ？

「トーキー・メーザー銃はパラライズモードにしろ。」

「なんでだ？殺してしまったほ「死体の処理、やるか？」皆パラライズモードにしどけ！」

そりや面倒だからに決まっているが、他にも理由がある。下手に殺して相手を怒らす必要はないかんねえ

『敵来ます！エアロック強制解放！』

「よしーついでえ！」

トーキーの言葉で保安局員が開きつつあるエアロックに一斉にメーザーブラスターを放つ。

まだ見ぬ海賊達はいきなりの銃撃に倒れた。

こっちにくるまえに撃つたから見えないけど、

「撃て！撃ち続けれろ！！銃身が焼け付くまで撃ち続けるんだ！」

「「おうー。」

俺のネタに正面に答える嘘

…突っ込み欲しかった

「撃ち方やめ…ゼロ、撃ち続けたらダメだろ…当たつた敵さん壁になつて奥のやつに当たらなくなるぞ?」

「あ、そつか!」  
「いやじゃないか。  
ネタだし

「やつてくれるじゃねえか。ガキ共…」

声のする方向には青竜刀のようなスクリフブレードを持ったヴァランタインがいた。

「…トーロ、手を出すなよ?」

「やるやなんのか?」

まあ艦隊戦じやっちは不安が残るからな。まだこちらのほうが勝機も高く「ヴァランタイン、あこれ非常口しょおーぶー!」

「俺の刀のサビにしてやる!」

そして対峙する俺とヴァランタイン

まずはスークリフブレードを振りかぶり、脳天目掛けて斬りかかつてぐる。

それに対しても自分のスークリフブレードを斜めにし受け止め、受け流す

結果、ヴァランタインのスークリフブレードは俺の右横に叩きつける結果となつた。

「なにい！」

「ひっ…や！」

そして、ヴァランタインの腹に蹴りをぶち込む。

「はっ…やぬじゅねえか！」

しかし、ヴァランタインは蹴りを食らっても平氣だった。  
むしろ笑つてやがる。

「うおおおお！」

蹴つた足を掴まれ、天井まで放り投げられた。

「ひっ…」

天井にぶつかる前に身体をよじり、天井に着地。

天井を蹴つて、ヴァランタイン目掛けて突つ込み斬りかかる。

しかし、ヴァランタインも太刀のようなスークリフブレードを抜き投

け止めて鍔競り合いになる。

ガキイイインー！という金属音と共に火花が散った。  
すぐさま弾き、地面へと着地する。

「あはははー、楽しいなあ坊主！」

ゆつたりと歩きながら右手に太刀型、左手に青龍刀型のスークリフ  
ブレードを持ち近づくヴァランタイン

…正直怖いわ。

にしてもよく身体が動くな。由兵技能力インストしたっぽいか？

「だがそろそろ終わらせるとするか。」

一気に駆け出したヴァランタイン。

相手は一本、一本受け止めたとしても一本由兵でやられる…

せめて二撃あれば…

…一撃？

俺はスークリフブレードの鞘を見てニタリと笑い、納刀した。

「ゼロー！？なにしてんだ！」

「観念したか？楽しかったぜ坊主ー！」

両手のスークリフブレードを俺田掛けでおひす。

しかし…

「…いくぜ抜刀術！」

鞘を抑え、片手で一気に抜き、加速された刃は青竜刀型にぶつかり、碎く！

「うおー!?」

驚くヴァランタイン。  
しかし迫る一撃目

「…かーらーのー！」

鞘を強くつかみ

「飛天御剣流・双龍閃！」

鞘で太刀型を叩き破壊する

「なにいい！」

斬撃の余波でその場で回転する俺

…すると

ブチッ

「がふつー！」

…なんだ今の音

一回転終えてヴァランタインのまつを見て驚愕した。

なんと腰にくくつづけていたエピタフがヴァランタインの顔面向けて直撃。後ろに倒れていくのだった。

「 「お、おかしいあああ…」 」

手下達がヴァランタインとエピタフを掴みエアロックから床ついていく

…つて…

「ちよっとまてえええ！エピタフ俺の…」

叫びも虚しく、エアロックは閉じていった。

「 …」

保安局員共々、呆然とする中、アナウンスが聞こえた。

『艦長！敵艦熱量増大！攻撃準備に入ります！』

グラムヘイムの攻撃食らつたらマズい！

「全艦撤退いい！レーンに逃げ込めええ！」

俺の悲鳴混じりの叫びを聞いて艦隊は逃げ始める。

俺が急ぎ艦橋へとあがり、後方のグランヘイムを移す画像をみると  
三連砲からレー・ザーを何度も放つグラントヘイムがいた。

「グロスター改中破！か、かすつただけでシールドモジュールオーバーヒート、しかもその次弾で左舷持つてかれましたあ！」

「マジか！？」

ファクトリー・シップにしたとき、後方になるから出力下げた小型版のシールドモジュール変えたのが仇になつたか！  
にしても一撃かよ！？

「『ぜ、前方にレーンの宇宙港…あ、グランヘイム反転、離れていきます…』

「『た、たすかったあ…』」

艦橋メンバーとクオーツが安堵する。

最初に艦隊戦挑んでたら死んでたな…これ。

何はともあれレーンについた。ようやく正規ストーリーに戻れるかな？

## 8章 激闘編2（後書き）

オリジナル編終了！

しかし思いつきでやつたから短かった：。

## 9章 エルメッシュ編1（前書き）

通常運用?にもどります

## 9章 エルメシツア編1

### 惑星レーン

「ぶつちやけ死ぬかと…思った」

入港後、今回は全員に休暇出した。

あの撤退の時、全員に精神的に負荷かけたので（知らないところで死の恐怖から精神的に壊れた奴が何人か出た。ヴァラントイン恐ろべし）今回は一週間寄港、外にいるヴァランタインも一週間もすればさすがにいなくなるだろつと踏んだからだ。

ただ整備班と科学班の半数を占めるマッシュ連中は、ペンペンしていた。連中は今回の休暇を利用してグロスター改の工廠区画を改造するらしい。

といつても効率化するだけらしい。

そして俺も酒場に来て例の人物を探すのだが…

…いた。

白髪の髭のじいさんと子どもだ。

「おじいさん子連れですか？珍しいですね。近づいて話しかける。」

「あんまりじこせんもに」やかに話してくれた

「こやじのトは弟子のウォル・ハガーシュ。わしはルー・スー・フ  
ターとこいつ者じゅ。ほれ挨拶しなやー」

「よ、よ、よ、よりじく  
もじつながらも挨拶す。

その様子に俺は若干苦笑した。

「ま、Jの通り話すのは苦手じやがなかなか優秀な弟子なんじや  
よ」

「せうなんですか？」

「う…」

うつむくウォル、笑顔で話しあつ俺とじいさん

「どこのドルーさん？この辺でルスファン・アルファロエンつてい  
うじ」老人を知りませんか？」

…あ、ルージーさんの雰囲気変わった。

「…誰からその名前を聞いたかのう？」

「…スーパー交渉タイムといつか一

「おや、艦長、いんなとこでどうしました？」

まさかのプロネンやん！  
まさかのＫＹです！

「… むや、 ルスフアンではありますか？お久しぶりです」

「ははは。 その節は世話になつたの♪」

まさかの知り合ひーーー？

そして即暴露！？

ちょスーパー交渉タイムは！？

懐かしの話を始めたプロネンをとつねてくつや 良かつたのか…

… 最初からプロネンをとつねてくつや 良かつたのか…

俺が酒場の○○ンしていると、ウォル君がポンポンと背中を叩いて  
慰めてくれた。

… 君はいい子や…

モヒモヒ

「思い出した。ディゴ、彼はエルメッシュア中央宙域で活動していた諜報員です。その時はアル・デアと名乗ってましたがね。」

「ほほ、これまた懐かしい名前が出たのう」

俺とプロネンさん、ルージーさんは椅子に座つて会話をしていた。

警戒しけたルージーさんはプロネンさんのおかげで心許してくれたようだ。

ちなみにこの一人の出会いはトランプ隊がエルメッシュアに来た時、一時的とはいえ、いろいろ教えをいただいたらしい。

「じゃアル・デアが本名なのですか？」

「まさか、ヤツの本名は軍の一員の者以外知りますまい。ただ名高いエルメッシュアの諜報員…その事実でヤツの能力は折り紙付きでしょ。なにセルスファンさんの居場所を突き止めた訳ですし。」

「ふむ…しかしヤツに見つかることは長居しきたかのう？」

「あ、それでしたら」

プロネンさんは紛争の事を話した。

…けどその中に俺の知らない事実もあるのは何故だろ?…

「ふむ…ベクサ星系の資源惑星帯はいつかそつなるとは思つておつたが…中央政府軍も身動き取れずか…」

「ひづらとしても依頼されたので仕方ないのですが…なんとかしたいのです。お力を拝借出来ませんか?」

頭を下げる俺

「若者にそこまで言われて腰を上げぬ訳にはいかぬな。お前さん方に同行するとしよう!」

「助かります!」

「またルスファンさんの教えが請えますね。よろしくお願ひします。」

嬉しそうな声を上げるプロネンさんと俺

「では10年ぶりに中央に戻るとするかの。ウォル」

「は、はい…」

二人を率いて酒場から出る俺とプロネンさん、道中プロネンさんが惑星の滞在期間に関して説明していたが、艦が2000m級と話したら中を探検したいらしく、すぐに乗船を希望した

…見て即驚かれたが…

中に入ると艦橋に案内した。

「ほほ、これは小マゼランのものではないな。」

「ランキング報酬のものですから、大マゼランのアイルラーゼンのものです」

ルージーさんに説明しているとウォル君がそわそわしました。

好きにみてきていいといつと走り出した

…あ、こけた。

けどすぐ立ち上がり、艦橋を見て回った。

「若いのお

「あはは、」

笑うルージーさんと俺

「ところでホログラムシステムは使わんのかのう……？」

「『ホログラムシステム?』

「む?」

クオーツの声に首を傾げるルージーさん、

そいや紹介まだだつたな

「あ、紹介が遅れたんですがうちの統合統括型A.I.のクオーツです」

『よろしくお願ひします~。』

「ほほ、人格付きとは今では珍しいのぉ。しかも女性型かの?」

『あ、わかります?』

：俺も密かに思っていたが何故女性型なのだろうか?

：ホログラムシステムと女性型AIか。

ルーディさんの話だと投影システムだけは端末にもついてるらしい

いいこと思いついた!

ルーディさんとウォル君に端末を渡して空き部屋に案内した後、俺  
はコンソールを叩いた。

『艦長? なにしてるんですか?』

「んー? 統括型AIに新たなプログラムを入れるんだ。」

『…艦長えつちいですか』

「何故に!?」

そんな問答をしつつも、どんなものになるか聞いたらうれしがって

いた。

そして7日後

「あー、出発前に発表したい事があります。」

今現在、艦橋には艦橋メンバー + ホロムさん、タカギさん、ワンさん、レインさん、トーロ、ティータがいた。

ちなみにイネスは艦橋メンバー入りしている。

困惑顔でみると同時に満足してから言った！

「今回、統合統括型A.I.がパワーアップしました！クオーツ・ショウツターライム！」

『はい、マスター！』

艦橋の艦長席の脇に一人の少女が現れた。

それは口リつぽくなつたショートカットの弱音ハク：まあぶっちゃけ鏡音リンの体格 + MEIKOの顔 + 弱音ハクの服と髪色つていう…

まあ俺がそう設定したんだけどな（笑）  
最初は体格もMEIKOとか弱音ハクにしようかと思ったが性格的にあわなかつた。

性格口りだもんな…うちのお姫様…  
何故か艦長からマスターになつたし

『ソロモンの人格付き統合統括型Aエニと、みんなのクーチャンです…』

ぐるっと一回してウインクしてキラッとした。

…つかマジで星出た…

「おお…すげえな」

「科学班として艦長を尊敬するである」

尊敬の眼差しを浴びる俺

…しかしそれはクオーツの一言で殺意に変わる

『…初めての相手はマスター…いやお兄ちゃんでした。』

「「な、なにいー!？」」

「はああああー!？」

前者皆、後者、俺

いきなりなにを言こ出すのやうつむのお姫様！

トスカさん…いや全員メーザーブラスター降ろせ…  
ヴァランタインより怖いぞ皆…

そして「ティータ&イネスーそんな冷めた皿で」しきみなんあああー！

『つてタイトル』トーラがタカギさんの端末にありましたナビ、あれなんですか？』

「へ？」

ま 固

るタカギ

『タイトル画像がおじさんと幼子でしたよ』

「…」

離 れ

るホロム

「うわ…ロコノン…ニセアベドキル…

「…はああああー…ホロム、何故離れたああー…

「来るなあるー…来るであるー…

「待てーーーのアマー…

逃げるホロムさんと追うタカギさん…

つかホロムさん女だったのか…

いつも小汚い格好だから分からなかつた…

『…あれ？ボクの歌は？』

「また今度だな」

…いつの間にか、ボクっ子になつてゐるし  
その後しばらくはタカギさんは口リコノもじくはペドと呼ばれたの  
は余談である。

そして時たまソロモンの各所で歌が流れ、士気が向上したりなど、  
クオーツの歌で色んな効果があがつたりした。

『…誰でもなく、君のために出来ること、僕は想う。僕は願う真つ  
直ぐにー…』

それで気づいたんだが、クオーツって水樹奈々ボイスなんだよね。  
たまたまなのか太古のデータがあったのか…

真実は闇の中である。

「…いつ聞いてもいい声ですねえ」

「心洗われるとはこの事ツスよ」

今は航行中につき、マドさんとシャンと俺が艦橋にいる。

他の艦は食事中である。

『ありがとうございます！』

「さて、一曲歌は中断。ゲートに入りエルメッシュア中央に戻るよ！」

「『了解！』ツス」

ソロモン艦隊はゲートへと突入していく。

## 9章 エルメッシュ編1（後書き）

さて、今回のパロディネタはいかがでしょうか！

ホログラムシステムはオープニングムービーでトトコンダが出でた  
あれです。

さて次回もお楽しみに！

## 10章 ハルメツニア編2（前書き）

最後のほうに微口ります。  
ご注意を？

エルメッツア中央に帰ってきた俺たち。そんな中一度パルネラで寄港後出港した時だった。

「ちょっとといいかの？」

艦橋にルージーさんがやつてきた。

「どうしたんです？」

「うむ、策がまとまつたのでわしらをドゥンガへ送ってくれんかの？」

「了解です。イネス、ヒメさん。進路変更してドゥンガへ、今回は有無言わさず最大加速でOK！」

「わかったわ。なら通常の倍のアイキューブ・エクシード推進に設定するわね。イネス君機関班に通達よろしく！」

「は、はい！」

アイキューブ・エクシード推進

インフラトン・インデュース・インヴァイターを主機関としたこの世界では一般的な推進手段

ようはめっちゃ早く最大移動速度は光速の87.6倍らしい。

けど通常の航海者は200倍を上限設定としている。何故なら機関に負担をかけるからだ。ちなみに通常の倍なので今回は400倍で行くことになる。

ただし機関に負担かかるため本当に遠くが目的地の時だけやるのだ。

「うそ、およそ一日でつくわ。」

『早いでしょー?えへへ』

まあ機関を手に入れた俺のおかげなんだけどね。

そして足早にドゥンガについた俺たちはルージーさん達を降ろして、策が終わるまでドゥンガとアルデスタ間で海賊狩りを始めた。

どうやら紛争準備のため人員や物資を載せた輸送船を襲うため結構な数がいた。

「前方敵海賊艦隊、ガラーナ級1、フランコ…いやジャンゴ級2、ジャンゴ級はアルデスタ軍の輸送船にとりついてます。」

艦橋のメインには輸送船を挟むように接舷したフランコ級一隻との正面で砲門を向けていたガラーナ級がいた

「ならトランプ隊のトラス発進、ジャンゴ級を狙うよつ通達、アーメスター級3、4番艦はグロスター改艦隊の護衛とし、1、2番艦は本艦とともにガラーナ級に向けて砲撃！」

「了解、トランプ隊発進してください。輸送船の支援お願いします。」

「

『了解です。ランプ隊発進します』

オペレーションに返事するプロネンさんの声が響く

右側のカタパルトからトラスが何機も発進していく。計30機発進したトラスはそれぞれ15機ずつに別れ、それぞれ人型に変形してジャンゴ級にトラスカノンを照射していく。

出力を抑えたのか、威力が低下している

それでも士気を削ぎ武器を破壊するには十分だった。もちろんソロモンとアーメスター級一隻からの攻撃もあり、ガラーナ級は被弾し、吹き飛んだ。

いやー早かつたね。

クオーツが着弾収束型管制システムのような事してくれたので最近は命中率がかなりいい。

「艦長、海賊は降伏、船を捨てて脱出艇にて逃げ出すようですが、それと輸送船から礼文が届いてます」

「OK、海賊船のほうはこちらでグロスター改のトラクタービームで引いていくとするか。」

離れていく輸送船を見送りながらグロスター改で  
引っ張る準備をする

「あ、スカーバレルのゼラーナ級接近中ツスよ。単艦ツス」

「様子がおかしいねえ……救援の数じゃない」

トスカさんの疑問ももつともだ。

「あ、敵艦より入電。」

『そこ』の艦、『黒』か?』

『『『黒?』』』

『なんだ知らないのか?ラツツイオのスカーバレル基地を壊滅させ、今は中央を謎の巨大戦艦を旗艦とした艦隊だよ。旗艦と艦載機は黒を基調した色だから『黒』ってスカーバレルでは呼んでいるんだが……知らなかつたのか?』

……それ明らかに誇張されているけどどうの艦隊だよな……  
しかし黒つて……短い呼び名だな

「なら多分俺たちが黒だな。んで?」

『ああ!お前ら海賊狙つてるならこの艦への攻撃は止めて欲しいんだ。これからルツキオの義勇軍に参加するところなんでな!』

「ふむ……いいだろつ、ただ他のは狙うぞ?」

『構わないさ!じゃあな!』

「ガラーナ級離れていくつス」

「しつかし義勇軍ねえ……よくある話だが紛争で海賊が自分からいく  
なんて……」

珍しいのだろうか？よくわからん。

『ルツキオルツキオ 本気になつたらルツキオ』

瞳を閉じて歌うクオーツ。

「なんだい？それ？」

『最近ルツキオやドゥンガの周辺海域で流れてるCMの歌ですよ？あらゆる投稿サイトに飛びまくりです。』

投稿サイトつてYouTubeとかニコニコみたいなもんか？

「ルツキオだけかい？アルデスタ軍のもあつても良さそうだけど…」

『ルツキオばかりですね。しかも投稿者は皆同一人物です。』

「…ふむ。一旦ルージーさんに様子を聞きにいくか  
原作通りならあのウォル君の策な訳だが…」

「了解、ドゥンガへの航路算出します。」

ソロモン艦隊はまたドゥンガへと走つていった

## 惑星ドゥンガ

今回は休暇は無しである。紛争前なので勧誘がひびこのも…

そして酒場

今回ま�ローネンセラが同行してくる。

「おお……！」

「どもっす

「ルッキオ軍が増強しているのですが…」

話しながら近づく俺とマクローネンセラ

「それでいいんじやよ。器に過ぎた料理をもればその器は砕け散る

…

「どうゆう事でしようか？」

「なるほど…」

首を傾げるマクローネンセラと頷く俺

「ワシとウォルは今まであらゆる手を使いルッキオ軍が兵を募つて  
いる噂をばらまいたのじや、おかげで海賊や「じゆつきが大量にルッ  
キオ軍に流れ込み今では軍の内部で暴動や略奪が起こつておる」

「しょせん連中に軍規など、馴染めないでしょうからね」

俺の言葉に頷くルージーさん

「連中を味方したルツキオ軍も手を焼いておつての、奴らの制圧といつ名分があれば…」

「中央政府軍が動ける…」

つぶやくプロネンさん

「うん、正解。そうですよね？ルーさん」

「うむ」

「――」さるルージーさんは立ち上がり

「これはウォルの発案での。もうすでに軍師としての力を發揮し始めておるよ」

「ほう…」

「へえ…」

意外そうなプロネンさんに対しても俺は感心した、原作で知つていたといえ、実際に目にするたと凄いな。

「さて、いこつか？ルツキオ軍の」「ろつきどもと民間人が戦つたという既成事実が必要じゃからのう。それから連絡せねば中央政府軍は乗り出せまい？」

「確かに…」

「では行きましょ「つか！」

「よいか？スカーバレル艦のみを落とすのじゃ。正規軍に手を出しへいかんからのう？」

「ういっす」

俺とプロネンさんはウォル君とルージーさんは引き連れてソロモンに戻った。

ソロモン艦隊はルツキオに向けて発進。ベクサ星系まで突き進む。

「ルツキオ周辺に到着」

「向かってくる艦あり！テフティアン級を旗艦にジャンゴ級8、フランコ級4隻」

「ほほ…なかなかの艦隊じゃのう。」

ルージーさんは戦闘アドバイザーとして艦橋に来てもらつた

「…まずいぜ。艦長…テフティアン級が前に出ていて一斉射撃したら落としてしまう。」

とジランさんから報告が

…まずいな。となるとトーラスでやるしか…

そんな時だった。

「ほほ…ならばこの老いぼれの策を一つ教えてやろうかの。誰かわしの端末にレーダー情報と解析データを送つてくれんか？」

『わ、わかりました！』

クオーツが敬礼しつつルージュさんの端末に情報を送る

「ふむ。敵陣後方に廃棄された資源衛星があるの…砲雷班、そこ二、三発。レーザーを撃つてみなさい。」

「お、おひ。」

ソロモンから主砲レーザー三門から放たれる

直撃した資源衛星は爆発し、瓦礫が吹き飛んでくる

…するどどうだらうか…

旗艦のテフィアン級がデフレクターで防ぐ中、瓦礫を避けるようにスカーバレル艦である水雷艦が前面に出てきた。

「これぞ。陣形無効化じゃの。」

「…す、すごい…」

陣形無効化って実際やるとこうなるのか…

「ま。そういう出来る技じゃないがのう」

「あ、テフィアン級、敵陣後方に…ツス」

「しゃあああ！撃つぜ撃つぜ！」

大興奮のジランさん。

ソロモンの主砲副砲が何度も火を噴く。  
ストレスたまつんかなー…

「…やり過ぎッス。テフィアン級以外破碎粉碎大喝采ッス」

「…正直すまん。」

テフィアン級の前方がデブリ地帯と化していた。  
「…ま。いいさ。次はベクサ星系だ。シアൻさん、中央政府軍に救  
難信号出して」

「わかりました」

デブリ地帯を迂回しつつ次はベクサ星系に向かう

side out

第三者 side

政府軍司令部

ある一室に呼び出されたモルポタ…オムスの上層である彼は作戦指  
令室に入室した。

「お呼びですか?ルキヤナン軍政長官」

中で座り待っていた男は口を開いた。

「うむ…ベクサ星系に君の1117艦隊を派遣する。出港の準備を始  
めたまえ」

「し、しかしそれは自治権の侵害では…?」

ベクサ星系は自治領が納めており、しかも紛争直前である。

彼としては非常に行きたくない。

「目的はルツキオ軍の一部分子による暴動の鎮圧だ。紛争介入ではない。…両国が示威行動と受け止めるのは勝手だがな…」

「…」

唚然とするモルポタ

彼としてはルキヤナンの言つ事ほどましくことは思えなかつた。

「どうした？ 急ぎたまえ」

「は、はっ！」

モルポタは急ぎ退室した

s i d e o u t

ゼロ s i d e

「…つわお」

ベクサ星系に到着し、数回の戦闘を行い、資源小惑星の影に艦隊を隠して休息を取っていたら多数の艦隊が押し寄せた。

中央政府軍である。

数回の広域放送した後、瞬く間にスカーバレル艦を駆逐、紛争を停戦に導いた。

余談であるがこの後、アルデスターとルッキオ両国は中央政府による  
調停を受諾、協定を結んだという

その最中俺はとこうと…

「よし、ちょっと資源貰つちやおつ。」

『はーい』

クオーツ操る無人トーラス軍団で資源をグロスター改やアルク改に  
いっぱい積み込み、ソロモンに研究用分の量を積み込んだ。

艦橋メンバーに若干呆れられた

そして俺はルーさんに礼を言い、彼の要望によりアルデスターに寄港  
した。

そして…

「え？ 降りる？」

「うむ… わしの力を必要とする場面は終わったようだのう」

確かにそうだ、しかしこの人気が降りるのはだいぶ先、しかもドゥン  
ガジヤあ…

「構いませんが…なぜですか？」

「この艦隊は軍との結びつきが強いからのう… わしらの居場所がバ  
レるかもしれませんのでな」

「確かに…」

結構協力してるもんな…

「つむ…世話になつたのう」

「そ、さよなら」

こうして一人は艦隊から去つた。

しかし別れの次には新たな出逢いもあるわけで…

その二日後

艦長室

『艦長? 艦内の倉庫付近に科学班と見知らぬ女性がいます』  
艦長室で溜まつた書類片付けていたらクオーツから報告がきた

「…見知らぬ女性? なんで倉庫に…」

『ベクサ星系で研究用レアメタル入れた倉庫前ですよ』

「…あ…。読めてきた。」

アルデスター、レアメタル、研究といったらあの人だな…

「とりあえず現場にいく…」

『わかりました』

俺は艦長室から出て行つた。

「べ、ベノサイトがこんなにたくさん…しかもすぐ脇に解析室があるなんて！」

「どうであるか？」

「ぜ、ぜひー！ちらからお願ひしたい！」

ああ…科学班数人とホロムさん…か？  
綺麗な格好しているためか、他人に見える

一言で言えば美人だ。そしてサラシでも巻いてたのだろうか。男に見えた要因でもあつたなにもない胸はその存在感を増していった。  
一言で言えば『デカい』。あえていおう。爆だ。

対する興奮してる女性は藍の長髪に白衣だ。

…ナーダ・ミコさんである。

「あ、あのホロムさん？その格好…」

「おや艦長、もしやこれであるか？いやはや、愛用のわらしがつに切れてしまつてな？」

手で掬いあげるなああー下から持ち上げるなあー頼むからーなにをとは言わないが！

「こ、いやそれはどうでもいいけど…」

男としては非常に興味あるが！

「その女性は？」

「うむ。この人はアルデスターの国立科学研究所のナーディヤ・ミコさんである。レアメタル研究に関しては名実ともに腕が高い。なのでヘッドハンティングしたいのである。」

とりあえず持ち上げた手を下げるー頼むからー

「…うん。その件は任せた。」

俺は鼻を押さえながら立ち去った。

その後…

「あ、おーいホロム…ガベラッ！」

「むへ~ど~じたであるか？ペド」

「そ、そういうんじゃねえ…それとそれから手え降ろせ…」

「どうでもいいが鼻から血す”」である。」けた時に鼻うつたか?」

「…だから強調させてる手え降ろしてくれえええ。」

「？」

タカギさん…俺よりウブかい?

そしてホロムさんは艦橋メンバー女性陣により新たなサラシをゲット。その凶悪なものをみた男性は科学班とタカギさん、俺だけらしい。

その後タカギさんのホロムさんに対する態度がだいぶ変わったのは余談である。

間章　??？編（前書き）

短いです。

読み飛ばしても可！

間章 ??? 編

? ? ? side

「確立スルハズダッタ観測者データ改竄…対イレギュラー用ファー  
ジ…襲撃者確立」

「出現箇所…カルバライヤ・ジャンクション」

「思考」ントロール。良好」

「追跡者…投入」

「デハ、目標を対イレギュラー一設定、」

「イレギュラーラハカイセヨ」「  
「イレギュラーラハカイセヨ」「  
「イレギュラーラハカイセヨ」

「…謎ノハツキング、アリ」

「イレギュラー発生！イレギュラー発生！」

「マタカ…」

「襲撃者ノデータ改竄…限界を越エ、イレギュラーヘノ執着が上昇

…」

「マサカ！我々ノギジユツをコエルノカ！？」

「ハッキング終了」

「追跡者以外被害無シ」

「…ナンナノダ。イッタイ」

side out

? ? side in

白い空間に真っ白い装束を着た女性がいた。

「無双ばかりでは飽きるから…ライバルを投入してやる。まあ。  
妾を楽しませろ！」

女性が高笑いを上げると彼女の背に元対の丘翼が生えた…

間章　??？編（後書き）

さて、イレギュラーな存在についてに 対策を始めた謎の連中！  
…わかる人には正体わかるんだろうな…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2763z/>

---

無限暴走航路

2011年12月26日21時04分発行